

桜が咲けばスズメが悪さ

佐倉市 坂本文雄

桜が咲けば蜜を求めて飛び回る昆虫の羽音が賑やかで生命の豊かさを実感します。野鳥ではメジロやヒヨドリも来て蜜を吸います。花の中に嘴を差し込むので、顔も嘴も花粉が付着して黄色く染まる程です。次から次へと花を訪れますから野鳥は蜜を得、桜は受粉できの双方に利益のある共生関係です。



ところがスズメは桜にとって厄介な鳥です。花粉の媒介はせずに蜜を盗み取ってしまうのです。そのやり方は桜の花首を食いちぎって蜜のある部分を食べてしまうので、盗蜜と言われます。これでは実が付かず種も出来ませんから桜は大損害です。



とはいえ、桜は本数が多い上、一斉に咲くのでスズメがいくら頑張っても被害の割合は微々たるものだと思います。

花見に行っても盗蜜の現場を実際に見た方は少ないでしょう。

写真を撮ろうとしても簡単にはチャンスが巡ってきません。

そこで私は桜が咲いたら先ずスズメの音がしているか耳を澄まします。音が聞こえたらその方向に行って地面に落ちている花を見ます。花弁が一枚ずつ散るの

は自然ですから、それは無視して五弁が揃ったままの形で落ちていたら上を見ます。風車の様に回転しながら落ちて来る花があればその真上でスズメが盗蜜している最中と分かります。

尚、見上げるような大木は角度がきつくて首が痛くなるので、背の低い若木の林が狙い目です。八重桜の花は豪華でも蜜を分泌しないので虫にも鳥にも不人気です。

春の訪れを告げる白い蝶、ツマキチョウ①

2月の中旬ごろから陽射しが力強くなり、TVでは、桜の開花予想が放送され、フィールドではウグイス、ヒバリの囀りが聞こえ始めます。

季節限定の生き物たちとの別れと出会いが入り交じり、「別れの前にもう一度会いたい!」「今年も元気な姿を見たい!」と心が落ち着かなくなります。そんな落ち着かない心を、いったん穏やかにしてくれるのが「ツマキチョウ」との出会いです。

ツマキチョウは、シロチョウ科の蝶で、オスの翅の先端が黄色であることが特徴です。また、翅の裏側は迷彩模様になっていて、枯草や落ち葉の上で翅を閉じて姿を隠す「木の葉隠れ」の術を使います。

*出現期：3月中旬～4月中旬

*食草：アブラナ科のムラサキハナナなど
葉ではなく種（果実）を食べます。

*5月下旬から6月上旬に蛹になります。

蛹の期間は、夏、秋、冬で一生の大半を、蛹で過ごします。春の暖かい日に白い蝶を見かけ、羽の先の黄色を確認して「ツマキチョウ」と分かった時、「今年も会えたね!」と声をかけています。



オス(翅の先端が黄色、名前の由来です)



メス(清楚な感じです)

西野孝法 (千葉市)

三年目の春、ツマキチョウ②

一年の大半を蛹で過ごすことだけでも十分に興味深いですが、さらに興味深いことに出会いました。

2010年の5月、庭にたくさんの幼虫がいたので、2頭飼育することにしました。

6月2日、飼育ケースの中を覗くと一頭見当たりません、幼虫が、家の中を這っているところを家族に見つかる大騒ぎになるので必死に探しましたが見つかりませんでした。6月5日、搜索を諦め、もう一頭が飼育ケースの蓋にぶら下がって蛹になったところで飼育ケースの掃除をしました。すると、飼育ケースの底に敷いてあったティッシュペーパーの隙間から蛹が出てきたのです。蝶の場合、飼育ケースの蓋にぶら下がって蛹化することが多いので、「随分変わった子だな?」と思いました。飼育ケースの蓋で蛹になった個体は、翌年(2011年)の3月29日に羽化しましたが、ティッシュペーパーの隙間から出てきた個体は、なんと!2012年4月3日に羽化したのです。この個体は、成虫になるまで足かけ3年かけたこととなります。

羽化の時期を一年もズラすのは、早春の不安定な天候に対応する生き残り戦略かもしれませんね!

ケースの底から出てきた
蛹、長い蛹の期間を無事に
過ごすため、より見つけ
にくい場所を選んだの
かもしれません。
今度、本人(ツマキチョウ)
に聞いてみます(笑)

2010年6月蛹化



足かけ3年

2012年4月羽化



西野孝法 (千葉市)

ミズキは生きている！

田島正子(船橋市)

東船橋駅から北へ歩いて 15 分、私の散歩コースの一つ海老川調整池(予定地)があります。そこに、鳥が糞をして芽生えたと思われるミズキが 1 本あり、毎年花が咲くのを楽しみにしていました。そのミズキが、一昨年(2019 年)の秋の台風で、根こそぎ倒れてしまいました。とても残念でしたが、翌年の春、最後の力をふりしぼるかのように木いっぱいには花を咲かせました。その後、夏から秋には、木の形がわからないほどクズにすっかり覆われてしまい、これでは生き延びることは難しいと思われました。冬になりクズは枯れ、枯れ木のようなミズキが姿を現しました。とても生きているようには見えませんが、万が一の願いを持って近づいてみると、赤い芽を沢山つけているではありませんか！ミズキは生き延びていたのです。ミズキの樹形は階段状でとてもきれいなのですが、倒れているのでそのようにはなりません。幹からも赤い枝を沢山伸ばし、なりふり構わず、「一つでも多くの芽を作るぞ」「生きてやる」という意思が伝わってくるようです。今年も、去年ほどではありませんが花芽を沢山つけました。花が咲くのが楽しみです。乾燥、暑さ、そしてクズに負けずに生きているミズキの生命力に感動しています。



2020 年 5 月 木いっぱいには花が咲いた



2020 年夏～秋 クズに覆われた



2020 年冬 赤い冬芽を沢山つけている

ミズキの葉や実を食べる虫たち



エサキモンキツノカメムシ
6 月頃、葉裏で卵を守っている



キアシドクガ 6 月頃
大発生することがある。毒はない



アゲハモドキ 8 月頃
幼虫はミズキなどを食べる



フタテンシロカギバ
幼虫はミズキなどを食べる



2021 年 3 月 25 日 いつ咲くかな？

森マジック、本当かな？

「子どもたちが森に遊びにくると、帰りにめっちゃめちゃ元気になっていくんです」とオープンフォレスト in 松戸のイベントの話を進める中でそんな意見が出てきました。

「それ、森マジックね」とひとこと。ちょっと違うこと想像しました。五輪のマークがもやっと浮かびましたが、打消しました。

聞くところによると、ある森で市内の小学校の2年生5クラスが代わるがわる遊びに来た。その後、児童のうちの一人が、親を誘って遊びに来たそうだ。そこまではどこにでもある風景。そこからが興味深い。別の子どもが親を伴ってさみだれ式に遊びに来た。これに加えて、親子が30人も集まって遊びたいとの申し出があり、土曜日の一日、遊んで行った。最初の森遊びが楽しかったからだという。ハンモック、ブランコや竹クラフトと特別のものはないのだが、広いバドミントンコートはひきつける。森の中でコートが取れるような広場の広がりには群を抜いている。学校のグラウンドとは違う。走り回れる車も来ない空間。不思議な空間に紛れ込んだ感覚に陥るのかもしれない。まさに森マジックが起こったとしても全く問題ない。

さらにもう一つ、親子が森で話をしていた時に、ニホントカゲがひょっこり顔を出した。森の会員がつかんで見せたところお父さん、お母さんとも目を合わせようとしない。固まって身動きが取れない。子どもがこわごわ捕まえようとすると、その手を振り切ってニホントカゲは逃げ出した。子どもが追いかける。やがてニホントカゲを掴んで持ってきた。「初めてです。」少し困惑気味な母親の横顔が印象的だった。

それからその子は平気で昆虫に触れるようになっているそうだ。



バドミントンコートのある野うさぎの森

初めて虫を捕まえた先生

もう一つ忘れられないのは21世紀の森と広場で2年生を対象に自然観察の手伝いをした時のことだ。子どもたちに昆虫が嫌いだという子どもたちがいても不思議ではない。もちろん、先生たちも虫嫌いがいってもおかしくない。だからあえて虫を捕まえることを勧めはしない。でもその先生は子どもたちが平気で捕まえる昆虫をおそろおそろ捕まえてみた。何のことはない。捕まえられたのである。この時は子どもが先生役になった瞬間だったのだと思う。そうした出会いや変身できる瞬間に出会えるのは森や公園のみどりがマジックを起こすのかもしれない。

今年のオープンフォレスト in 松戸は5月15日から23日までの9日間18か所の森を公開予定です。森の中も花盛りです。お出かけください。

(松戸市 藤田 隆)



オープンフォレスト紙敷石みやの森

北の国だより

3月の初めに大雪が降り、一晩で車がすっぽり埋まってしまい、さすが北海道、気が抜けないと思っていたばかりなのに、3月下旬には市街地からは雪が全くなくなってしまいました。季節の移り変わりのスピードに改めて驚いています。
(佐野由輝)

春の訪れを告げる根開き

3月に入り、徐々に気温が高くなると、真っ白な雪に覆われていた森も、木々の根元の周りから少しずつ雪が解け、地面が現れてきます。このような現象を根開きといい、北国では春の訪れを告げる風物詩となっています。

木の根元から雪が解ける原因としては、木の表面温度が相対的に高いこと、幹の周りの風の流れ、雨が幹を伝って流れ落ちる樹幹流等が考えられています。四季の歌の歌詞では、雪をとく大地のようなぼくの母親となっていますが、森に生える木々は、お母さんのお手伝いをする子どもたちといったところでしょうか。



雪国で冬を乗り切る樹木の知恵

雪が解けて現れてくるのは茶色の大地かと思えば、いつのまに生えたのか、青々と葉っぱを茂らした木が地面を覆い尽くしていました。特に目だったのは、エゾユズリハ、ハイイヌガヤなどで、これらの樹種は、雪国に適應した木です。

千葉に生えている近縁種のコズリハやイヌガヤたちは、幹をしっかりと垂直に立て、樹高も高くなりますが、エゾユズリハやハイイヌガヤたちは、幹を地面に這うように伸ばし、垂直方向には高く伸びません。これは、雪が降れば、無理に抵抗せず、体を寝かせ、温かい雪の下に潜って、寒くて長い冬を乗り切る戦略を選んだ結果ですね。



雪が溶けて太陽の光を求めて真っ先に顔を出したのは？

雪が解けて、気温が高くなると、北海道も、いよいよ草花が咲き乱れる季節の到来です。

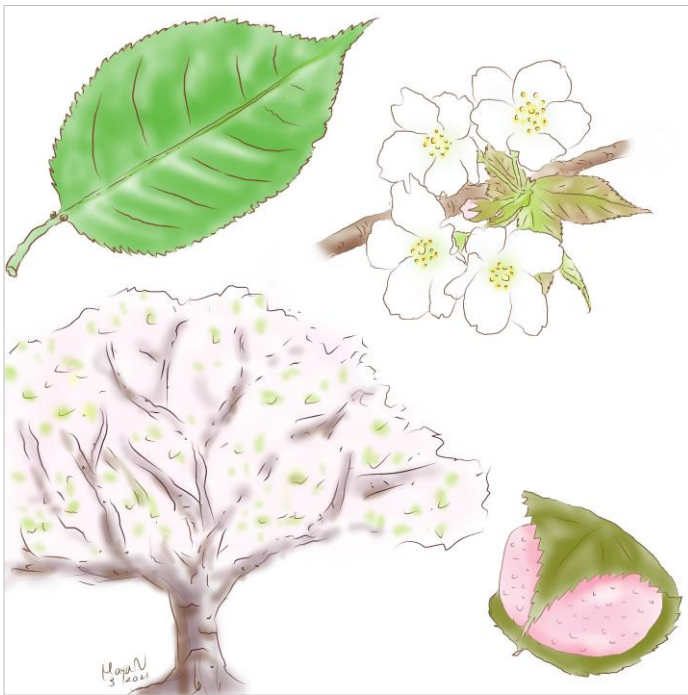
そして、雪解けを待ちわびたように、真っ先に顔を出してきたのは、蔦の臺と福寿草でした。蔦の臺が伸び、大きな葉っぱを広げると、コロボックルたちが遊び出しますね。

さて、蔦の臺と福寿草に続いて、現れてくるのは誰でしょうか？今から楽しみです。



樹木とキノコのスケッチ～描いて発見する自然のすばらしさ～（中田真也子）

1年間、スケッチを見てくださってありがとうございました。コロナで始まり、終わった1年ではありましたが、私の絵の腕がすこーしだけ上がった気がします。絵を描くのは時間がかかりますが、生き物の勉強にもなりますし、精神の安定感、幸福度が増す気がします。コロナ禍の中最適な活動でした。もし、これからiPadを使って絵を描きたい方がいらっしゃったらお声がけください。我流ではありますが、簡単な描き方などお伝え出来ると思います。



<オオシマザクラ>

オオシマザクラが満開です。オオシマザクラは私の住む街のシンボルのような桜。埋め立て地で海からの強風にさらされても強く生き続ける逞しさがあります。

オオシマザクラ本来の特性が存分に活かされてどっしりとした姿（背が高くならず、横に広がった樹形）になったのだと思うと感動します。これだと風にも折れにくい！

オオシマザクラはソメイヨシノやカワヅクラの親でもあるんですね。それらの大きな花やどっしりとした太い幹はオオシマザクラから受け継いだんですね。

絵には花より団子の人向けに桜餅の絵もかいてみました。

2021年3月25日千葉市幕張海浜公園

<オオバヤシャブシ>

幕張海浜公園に生えているオオバヤシャブシを描きました。今が花盛りです。

オオバヤシャブシはヤシャブシと違い雌花の方が枝の先端につく性質を持っています。

私が幕張海浜公園の樹名板作りの活動を始めた15年前には元気なオオバヤシャブシが多くありました。しかし今はオオバヤシャブシの木は、多くが弱ったり枯れたりしてしまいました。一方で成長が遅いと思っていたスダジヤやタブノキは最近大きく成長し始めたのに気づきました。

木の命の長さや成長が樹種によって全く違うということを都市公園の自然観察から学んでいます。

2021年3月20日 千葉市幕張海浜公園

